rongorongo

茨城キリスト教大学
文化交流学科

茨城キリスト教大学文学部文化交流学科　〒319-1295 茨城県日立市大みか町６－１１－１　TEL 0294-52-3215　FAX 0294-52-3493

在中国 日系企業の文化摩擦

04年卒業生・佐藤伸幸さん　地球市民論の授業でゲストトーク

11月28日、地球市民論の時間に本学の卒業生である佐藤伸幸さんが講演を行った。

佐藤さんは大学在学中に天津師範大学へ一年間の交換留学を経験し、現代中国の経済発展と日系企業の進出、そしてそれらがもたらす文化摩擦を目の当たりにした。

04年に本学を卒業後、「中国における日系企業のマネージメント」（中国に進出した日系企業が経験する文化摩擦やトラブルなどからそれらを解決する方法を探る）を勉強するため04年9月、同大学大学院（政治経済学院企業経営専攻）へ進学した。

今年7月の卒業を期に帰国し、12月から「中国留学で学んだ知識と経験を活かしたい」と、中国に多くの自社工場を持つフォスター電機に就職。「数年後の目標は、当社の中国にある現地法人で働くことです」と語る。

今回のトークは、佐藤さんが本学科に入学当初、漠然と抱いていた「この大学で一体何を学ぶべきか？」といった疑問を常に自分自身に投げかけていたという話に始まり、国内での中国、韓国人留学生との交流経験や、その経験から、「なぜ自分が中国留学するに至ったのか？」について話されました。

また、中国留学中に実際に受けたカルチャーショックについて、具体的で面白いエピソードを交え、会場の学生も佐藤さんの軽快な語り口に興味津々といった様子で始終笑い声が絶えない講演だった。

最後に、佐藤さん自身が肌で感じた日中間の文化の違いや、中国の良い点などを挙げ、「日中には共通する文化が多い故に、互いに細かな違いが許せない」と話し、異文化と交流する上で、「単に自分の文化との違いを否定・拒絶するのではなく、互いの文化を認め合い、受け入れることが大切だ」と述べられた。

講演を聴いて…

◆今回の授業で聞いた講義で、隣の国なのに様々なことが日本とは違っていることを知りました。まず驚いたことは、日本と中国での色に対する印象が異なることです。日本ではHな印象を持つ色がピンクなのに中国では黄色だと聞いて、こんなに近い国なのにやっぱり文化は全く違うんだということを再認識できました。

◆佐藤さんのお話はとても面白かったです。佐藤さんの話でとくに共感したのは、アジアの国は共通点が多い反面、お互いの細かい違いが許せないきらいがあるということでした。佐藤さんと同じように私も他と違うことを否定・拒絶するのではなく面白いと感じ受け入れることが大事だと思います。それをここ茨キリで日本で学んだ気がします。すごく有益な時間でした。ありがとうございました。

授業感想お寄せ下さい

今年度の授業も終盤戦です。残すは試験。

どの授業が面白かった？

あの先生の授業大変だった？

こんな会話を友達と4月の履修登録時にした経験はありませんか？

授業選びにはみなさん頭を悩ませると思います。そこで編集部では、「授業感想集」を作成することにしました。

今年度履修した授業の中で『印象に残った科目名とその感想』をいくつか教えてください。

別紙に記入し、来週この授業担当の先生にお渡しください。

この授業感想集は4月号に掲載しますので来年度の履修登録時に参考になるはずです。

ご協力お願い致します。

ご協力に感謝!!

ボランティア サポート基金　キャンペーン報告

12月10日～21日の二週間に渡り、アジアンボランティア・サポート基金の呼びかけキャンペーンを行いました。おかげさまで八万円集めることができました。ご協力ありがとうございました。

この基金は、毎年夏季休業中にカンボジアで行われる「日本語・英語教育ボランティア」を初めとしたアジア地域でのボランティア活動をサポートするために使われます。

また、学園祭アジアンバザールの買出し資金としても貸し出されて役立っています。

昼休みに生協食堂や一号館ラウンジにてキャンペーンを見かけた方、興味を持たれた方も少なくないでしょう。

今回はキャンペーン中にアジアンバザールの商品を販売するという新しい試みも始まりました。テーブルの上に並べられる小物が中心でしたが学園祭とはまた違った雰囲気を楽しんでいただけたのではないかと思います。

今後ともアジアンボランティア・サポート基金をどうぞよろしくお願いします。

08年1月号目次

1面
◆卒業生講演佐藤伸幸さん
◆授業感想募集
◆ボランティアサポート基金報告
2～3面
◆アジバザ報告・感想
◆OC留学生帰国
4～5面
◆就職活動報告
◆図書案内
6～7面
◆佐々木冬流先生に聞く
8面
◆野中真理子氏講演
◆編集後記

アジアンバザール＆カフェ

学園祭恒例

昨年の11月2、3日に行われた「アジアンバザール＆カフェ」の報告を、自身もアジバザに参加した編集部・戸田が担当します。

バザールでは学生が直接アジア地域（カンボジア、ベトナム、タイ、韓国）で買い付けてきた雑貨や洋服を販売しました。カフェでは定番のベトナムコーヒーをメインに韓国柚子茶、中国工芸茶などアジアの飲み物を販売。今回はベトナムから取り寄せた「フォー」をメニューに加えるなど新しい試みもありました。

「アジアを身近に感じてもらう」ことを目的とし、アジア～ンな『店』を作ることができました。スタッフと協力し、一つの『店』を作り終えた時はとても達成感がありました。

学園祭出店4度目となる今回は例年に増し大繁盛となりました。

次回のアジバザにはまだまだ間に合います！　興味を持たれた方、一緒にやりましょう!!　大歓迎です。

アジバザの会場は色彩も鮮やかにアジア～ンな雰囲気だった。今年はバーコードの導入でレジの効率がずっとアップした。

吊るすとかわいいカメのマスコット

以下、今年のアジバザ＆カフェ参加メンバーの感想です。

買出しから参加

1年次　鈴木 麻由

学園祭が終わり商品の整理をしながら「たくさん売れたなぁ」とほっと一息。

商品を手に取るとかすかに市場の匂いがする。現地の市場には独特の匂いが漂っていた。確かにあのエネルギーに満ちた市場にあったものがこうして手元にあって、またここから誰かの手に渡っていく。輸入食品だとか海を渡って来た物は身の回りに溢れているはずなのに感慨深い気持ちになった。

アジバザには買い出しから参加させて頂いた。市場での売り子さんとした値段交渉は思い出深い。商品に値札なんてものはまず存在しないので後は交渉次第。「えっ、これ10ドルもするの？　あっちの店で3ドルで売ってたよ！　ディスカウントプリーズ。」バイヤー気分だがつたない英語で伝えてみると、「う～ん…4ドルでいいよ」あっさり流暢な日本語で言われたり。もし今の一言が無かったら10ドル払っていたかもしれない…そもそもいくらまでは値切っていいんだろうか。得体の知れないシステムだ。時間をかけて客と値段交渉するのが面倒にならないのかと疑問を感じるほど、売り子さんとコミュニケーションをした。そうして買った物を大事にリュックに詰め込むと、予想外の重さにほうり投げたくなったが、ハードで楽しい思い出ができてよかった。

アジア一色になった

2年次　橋本 麻美

今年初めて、友達に誘われてアジアンバザールに参加した。去年実際にお客としてお店に行き、可愛い雑貨と美味しいお茶に好感を持ったこと、そして来年（08年）に授業の一環でタイとカンボジアに行くということが、参加するに至った大きな理由である。

去年より参加していた友達を除き、学年も学科も違う他のメンバーには知り合いはおらず、最初の顔合わせではとても不安な気持ちが大きかった。しかし準備を重ねるにつれ、先輩たちとの距離も縮まり、現地での買い付けの話、またカンボジア日本友好学園での子供たちの話など、たくさんの話を聞かせてもらった。これは来年現地に行く私にとって非常に興味深いものであり、同時に来年のアジアンボランティアにも興味がわいた。

そしてお店作りでは、何度も教室に足を運び、買い手側のことを考えてのディスプレイのシミュレーションや、お客さんの目のひくようなポップ作り、アジアを理解してもらうための掲示物作りなど、外が暗くなるまで作業を続けた。そうして前日、殺風景だった教室が手作り感に溢れたアジア一色になった時の感動は、今でも忘れられない。

皆で協力し合い一つのものを作り上げるということの楽しさ・素晴らしさを、私は改めて感じた。

来年も是非参加して学園祭を盛り上げて行きたい。

中国工芸茶・ベトナム式コーヒー

1年次　松本 千里

私は友達の誘いをきっかけにアジバザに参加しました。アジバザではカフェとショップの二つを運営しています。どちらのお店でもアジア諸国の現地で売られていた品物を買ってきて商品として出していると聞いた時は驚きました。

経済的に貧しい国の物を買うのは助けになるし、私たちも花の素敵な香りのするお茶や、日本のセンスとは少し違った手作り感と温かみのある雑貨などを通しアジアの文化に触れることができます。

カフェではアジア諸国のお茶や食べ物を中心に出しました。お湯を注ぐと花が咲く仕組みになっている中国工芸茶は、初めて見たときはとても感動しました。

ベトナムコーヒーは現地の人と同じ「ベトナム式」の淹れ方で出しました。このベトナム式の淹れ方でコーヒーの味を統一するのは難しく苦労しましたが、お客さんにアジア文化を伝えることができたのでよかったです。

アジバザに参加してアジア諸国には素敵な文化がたくさんあることや発展途上国としての問題もあるのだと改めて思いました。

この日は忘れられない今年一番の思い出になりました。

なかなかできない経験

2年次　梶山 真矢

私はアジバザ2年目でしたが、今年は人数も増え、場所も新しくなったので、昨年よりもグレードアップした本格的なものになったと思います！

今年は買い付けは出来ませんでしたが、自分が選んできたものを売るということはなかなか出来ない経験です。そして、自分が興味を持っていることに対して、興味を持ってきてくれたお客さんと会話がはずんだり、スタッフたちと仲良くなれたことは私にとってすごく大きな収穫でした。

来年もまた現地に行くつもりです。来年のアジバザも期待して下さい！

楽しみが増えました

2年次　越沙 央里

来年の春に授業でタイとカンボジアに行くので、少しでもその勉強になればと思い参加しました。

私はカフェスタッフとして働きました。カフェで出したメニューはタイやベトナムならではのフォーやベトナムコーヒーなど、私にとっても初めてのものばかりでとても新鮮でした。

特にベトナムコーヒーは見たことも聞いたこともなかったので、初めはコーヒーの淹れ方から練習しました。お湯を入れる前の豆はとても甘い香りがします。けれど、出来上がるとても苦いです。本場ベトナムではその中にコンデンスミルクをたっぷり入れて飲むので、私達もコンデンスミルクを入れて出しました。コーヒーが苦手な私もおいしい!!と思ったので来年アジバザに来たときはぜひ飲んでみて下さい!!

他の国で生活するうえで食事は不安なことの一つでした。しかし、アジバザを通してその不安も解消され、タイやカンボジアに行く楽しみが一つ増えました。アジバザに参加して本当によかったと思います。

ベトナム産の笛

アジバザ人気商品ランキング

1位　ストール
2位　ポーチ
3位　楽器
4位　ベトナムのお菓子
5位　水牛の角の箸など

フォーを百食完売!!

～プラスのエネルギー～

5年次　田中 悠介

私がアジバザに参加するのも今年で三度目。今年もカフェ店長として参加させて頂きました。去年は失敗の連続だったので今年はリベンジを、と気合を入れていた私の心配を他所に、は去年とは比べものにならないほどパワーアップすることが出来ました。小さな問題や今後に向けての課題は残りましたが、成功と呼べる結果になりました。

今年は新商品としてベトナムから直接買い付けた「フォー」(米で作られた麺)を100食完売という結果を出すことが出来ました。

初めての試みだったので実際にベトナムから商品が届くまで気が気じゃないという感じでしたが、どうにか無事販売することが出来ました。「注文すればそりゃ届くだろう」とお思いになられる方もいると思いますが、何せベトナムからということで期日通りに届くかどうかという不安がありました。ベトナムからの発送にはホーチミンで働く文化交流学科の卒業生に協力して頂きました。

例年通りベトナムコーヒーの売れ行きは好調で、客席も去年の倍設け（教室が狭かったためオープンカフェにて）店の規模も大きくすることができました。そして強力なメンバーに恵まれたことが何よりの成功要因でした。

本格ベトナムコーヒー

来年はアジバザを見に来れるかわかりませんが、来年も今年のようなチームワークの良さや楽しい雰囲気の中でアジアンカフェがオープンしてたらいいなと思っています。

アジバザは「プラス」のエネルギーに溢れている場所だということです。そのためそこに集まってくる人たちも皆「素敵なエネルギー」を持った人達だと思います。そんな強力な人たちが集まっている場所なので意見の衝突や落ち込むことも少なくありませんが、そんなことを繰り返していくからこそ得られる充実感やそれらの経験は私の貴重な財産だと思います。

OC からの留学生帰国

5月に来日したオクラホマ・クリスチャン大学からの長期交換留学生が12月13日に帰国しました。二人とも本学へは二度目の留学でした。一度目は短期交換留学生として、二度目は長期交換留学生として来ました。

現代英語学科の授業他、日本語教師になるための勉強や日本語についても熱心に勉強していました。

◆日本はたのしかったです。にっこうとおきなわとときょうにいきました。わたしの日本のともだちはしんせつでたのしいひとたちでした。ことしのなつにカンボジアにいきました。

日本のたべものがこいしくなります。日本をはなれるのがさみしいです。みなさんにおれいをいいたいです。どうもありがとうございました。

ロング　ケイト　アレクシス

◆日本人の友達と色んなことをしました。色んなところに行きました。色んな物を見ました。日光や宮島や沖縄や東京や京都です。茨キリの大学生とたくさんいい友達になれました。日本の文化を勉強できてよかったです。

日本語をもっと勉強して、また日本に来たいです。オクラホマの大学を卒業したら、日本の会社で働きたいです。

アイルビーバック。

ジョセフ　ハートマン

就職活動 報告

はっきり言って 就職活動はとても大変です

土田　奈保子

キャリセン

私が就職活動を本格的に始めたのは3年生の3月になってからでした。それまでは東京で開催された（リクナビや毎ナビ主催の）合同の説明会やキャリセン主催の企業説明会に参加して、いろいろな企業の説明を聞いてまわりました。そのなかで一番興味を持ったのが「金融関係」でした。

その後エントリーをすませ、履歴書に取り掛かろうと思ったのですが、どう書けばよいのかわからずそこでストップしてしまいました。そのとき相談しに行ったのがキャリセンでした。

キャリセンでは親身に相談に乗ってもらい、そのなかで履歴書の中身は参考書などの内容を真似て書くのではなく、自分の言葉で特に〔自分らしさ〕が出るように書くことがとても大切だとアドバイスしてもらいました。

またどうしても志望動機が書けないときは、直接各銀行の支店に行ってそれぞれの銀行の違いを書いてみるのがいいよ、と言ってくれました。

支店見学

その次の日から私は受けようと思っている銀行5社を日立支店と大甕支店の各2ヶ所ずつまわることにしました。はじめはとても緊張したのですが、慣れてくると受付カウンターの人の様子やお客さんとのやりとりを聞き、メモにしっかり書き留めました。（このメモにはささいなことでも書くように努めました。）また第一志望の銀行には支店見学をさせてもらいました。その際、副支店長さんが入社3年目の方と入社1年目の女性行員の方と話をする機会を与えてもらい（短い時間でしたが）、銀行の内容だけでなく就職活動についてのアドバイスなど貴重な話を聞くことが出来ました。

適正検査

4月に入ると各銀行では採用試験が始まりました。面接においては面接官の目を見て話す、人の話をよく聞くなど基本的な動作ができれば大体受かると思います。苦手な人でも慣れれば簡単に出来ると思います。

私が一番苦戦したのは「SPI」や「GAB」の適性検査でした。内容としては中学・高校で習った問題ばかりなのですが、私は解き方をすっかり忘れてしまっていたので、もう一度解き方を思い出すのがとても大変でした。本番の筆記試験では時間に限りがあるのであまりゆっくり考えている暇はありません。答えはもちろん、問題を解くスピードが大切になってくるので、それに慣れるために一冊の参考書を一日に何度も繰り返し解いて覚えました。それを集中的に一週間くらい続けた結果、筆記試験をパスすることができました。

左：土田奈保子さん　右：今野彩子さん

内定

最終的に私は2ヶ所から内定をいただきましたが、人事の人の対応や他の内定者の雰囲気をみて私に合っていると思い今の会社に決めました。

はっきり言って就職活動はとても大変です。しかし、そのなかで自分のやりたいことをきちんと見据えて会社を決めていってください。あと積極的に動いてどんどん情報を集めて自分のものにしてください。履歴書の中できっと役に立つと思います。

内定をもらうまでとても大変だと思いますが、最後まで諦めずにやり遂げてください。そうすればきっと自分の希望の会社から内定をもらうことが出来ると思います。頑張ってください。

自問自答

就活中の約11ヶ月間、ずっと自分と向き合って自問自答を繰り返してきました。そして何度も周りと自分を比較してしまい、落ち込んでやる気がなくなり、焦って、また落ち込んで、何もやる気が起きなくなり、また比較して、焦って…を繰り返し悪循環に陥ってしまうことが度々ありました。

その時、私の力になったのは周りの大人の意見でした。会社説明会で出会った人事の方、教育実習先の先生方、アルバイト先の先輩からのアドバイスはとても参考になります。自分が周りからどのように見られているかも知ることができました。

また、教職か就職かはなるべく早い段階で決めておいた方がいいと思います。人生の選択肢はたくさんあるに越したことはないですが、教職と就活の両立は簡単ではありませんでした。どちらも中途半端になってしまったと思います。

自分の足と目で

そして今回の就活で一番失敗したのは、キャリア支援センターを4年の夏まで利用しなかったことです。キャリセンの人たちは本当に親身になって相談にのって下さるので、もっと早くに行けば良かったです。

就活で一番大切なのは、自分の足と目で情報を積極的に集めることだと思います。インターネット上の情報よりも、自分の目で見て、自分なりの視点を持ってアピールできるとベストだと思います。そして、周りのペースに流されることなく、自分のペースで就職活動を頑張ってください。

自分の足と目で情報を積極的に集めること

今野彩子

教職か就職か…

いよいよ08年になり、3年生の人たちの中には就職活動を本格的に始めた人、そろそろ始めようとしている人、まだいいやと考えている人などがいると思います。

私が就職活動を強く意識し始めたのは12月頃で、自分に何が向いているのか、何になりたいのかとても悩んでいました。教職か就職か…時間だけがどんどん進み、焦ってはいるけれど何も手につかない状況でした。

迷いながらも本腰を入れて活動し始めたのは、キャリア支援センターが企画した東京ビックサイトでの就職説明会でした。すでに本格的に活動している人たちを目の当たりにして、このままではいけないと、気になった会社はとりあえず会社説明会に出席しながら自分のやりたい事を考えていました。

そして、5月中旬に内定を1社から頂き、気持ちを切り替えて、5月下旬から3週間は教育実習をしました。

教育実習後、教職と就職とでまた悩み始めました。悩んでいるなかで内定を頂いた懇談会に何度か出席しているうちに、「この会社、私には合わないかも…違う会社ももう少し見てみたい」と思うようになり、また就活を始めました。そして10月にまた内定をとることができ、就職先を決めました。

◆07年度就職内定先

07年12月末時点で確認できた範囲で、次のような企業に採用内定を得ています。

イエローハット／AEリソースサポート／カスミ／関東つくば銀行／北関東マツダ／航空自衛隊／サイバーテック／常陽銀行／スズキ茨城／綜合警備保障／ダイヤモンドダイニング／中央労働金庫／寺島薬局／トヨタレンタリース／東洋証券／とんQ／那珂ハウジング／西尾レントオール／橋本商工／日立マグネチックワイヤー／FREE'Sインターナショナル／水戸エンジニアリングサービス／水戸証券／郵便局／郵便事業

この一冊、私のお勧めです！【図書案内】

「あなたのお勧めの一冊は何ですか？」というテーマで五人の方に作品に対する思いを語っていただきました。

『ガンジス河でバタフライ』

たかのてるこ著／幻冬舎文庫

あなたは、ひとり旅に出る人をどんな人だと思いますか？　私は、この本を読むまで勇気のある人や行動力のある人がひとり旅に適していると思っていました。この本は、英語もロクにできない、極度の方向オンチで小心者の著者が旅好きの兄の影響から「世界を股にかけて旅をする人」に憧れ、香港やシンガポール、マレーシア、インドでひとり旅をしながら成長していく話です。

初のひとり旅は、「航空券を買った瞬間から生きた心地がしない」など弱音を吐いていた著者も現地に着いたら片言の英語で一生懸命ボディランゲージを入れながら人々と交流します。そして、自分自身を受け入れるようになり、自分の人生は自分でクリエイトしていたのだと気付いていきます。

読み終わった後には、私も旅に出て新しい自分に出会いたくなりました。

〔1年次　田中麻梨恵〕

『海辺のカフカ』

村上春樹著／新潮社

私がオススメする本は、村上春樹の『海辺のカフカ』です。この作品は海外でも高く評価された作品で主人公が二人存在し、物語も二部構成になっています。二つの話は上巻ではずっと平行線に進んでいくのですが下巻から……。主人公である「カフカ少年」と「ナカタさん」のパラレルな物語はダークな「宮崎駿」の作品といった印象を受けました。オススメを書かせてもらってなんですが理屈で説明できないと納得できない方には正直オススメはできません。なので逆をいえば今まであまり小説を読んだことのない方にはオススメできると思います。自分の感覚で読むのがこの作品の面白さだと思うので。

それから15歳の少年である「カフカ少年」の自分探しの旅は今現在進路で悩んでいる学生に共感を抱いてもらえるかと思います。

私はこの作品から自分を見つめ直すきっかけをもらいました。物語の内容にはあまり触れませんでした。読もうと思ってくれたみなさんには是非ゼロから読んでもらいたいからです。

〔5年次　大内和彦〕

『想い事。』

Cocco 著／毎日新聞社

私が Cocco に興味を抱いたのは今年のロックインジャパンに行ってから。その時初めて Cocco の歌を生で聴いた。最初はロックな曲で始まって、その歌詞が「蹴り上げて鼻をへし折る」とか「ひざまづきなさい」など、とても衝撃的だった。

そして曲がバラードになった時、何千人という人が静まり返った。拍手をするのも忘れて。

後日、そんな Cocco のエッセイ本が出ることを知った。それが「想い事。」だ。はっきり言ってこの本、言葉使いが凄い。「ぶっ殺してくれ」とか「馬鹿野郎」とか。でも、私は「この人はなんて綺麗な人なんだろう」と思った。そんな事を想わせる本。草木や花々の美しい写真と共に、Cocco の想いがゆっくりと溢れてくる。人間の汚さを見て、絶望した人にぜひ読んで欲しい。〔1年次　大津憲子〕

『重力ピエロ』

伊坂幸太郎著／新潮社

「春が二階から落ちてきた」

物語は、そんな印象的なフレーズで幕を開ける。主軸となるのは、市内で巻き起こる連続放火事件と、その事件現場に残されたグラフィティアートの謎に興味を持つとある家族。無意味な言葉の羅列に見える落書きが意味するものとは一体――。

一見社会派ミステリーのようにも思える本書は、一筋縄ではいかない伊坂氏流の「罪と罰」とも言える内容に仕上がっている。産みの親と育ての親、憎むべき犯罪者と、その犯罪者から生まれた子供、レイプという犯罪の本質。物語の背景にあるテーマはとても重い物なのに、それを感じさせないのは、魅力溢れる登場人物と彼らの軽快な語り口の成せる技である。テンポ良く交わされる小気味良い会話や、知識欲を満たす雑学もまた物語をうまく盛り立てていると言えよう。しかし、あからさまな伏線や先の読める展開など、純粋なミステリー作品としては一流とは言い難く、物足りない部分も多い。それでも最後まで読者を引っ張り、欠点全てを補い余りある程の「爽快な美しさ」が、この作品には詰まっている。

「本当に深刻なことは、陽気に伝えるべきなんだよ。」そうキャラクタに語らせた伊坂氏の目論見は見事成功していると、本を閉じながらしみじみと感じた。〔2年次　橋本麻美〕

『項羽と劉邦』

司馬遼太郎著／新潮文庫

私が紹介したいのは司馬遼太郎の『項羽と劉邦』という本です。司馬遼太郎さんの著書は、徹底的に調べ抜かれた史実が独特の世界観で描かれていて、素晴らしい作品が多いのですが、その中でこの『項羽と劉邦』という作品は印象に残っています。内容は初の中国統一を成し遂げた秦の始皇帝の死後、劉邦が楚の超人項羽と争いながら、大漢帝国を築き上げるまでが描かれた作品です。日本で中国の時代は封神演義や三国史の時代ほど有名ではありませんが、二千年以上前のことにも関わらず、現代と変わらぬ人間関係や現代人以上の才能、現代社会でも重要な人間関係や人の才能や運などの本質を考えさせられる小説です。

また「四面楚歌」や「背水の陣」、虞美人（草）などの私達がよく知る言葉も、この二人の争いの中から生まれました。最後に歴史系の小説の面白い所は、RPGゲームやファンタジー映画のように、その人物とその世界や時間軸で共に旅をしているような気持ちになることです。その中には自身の世界にも通じる知識や感情、決断や喜び・苦悩などが詰まってます。

皆さんも機会があったら、違う時代・違う世界を旅してみてはいかがでしょうか。〔4年次　金子啓隆〕

佐々木冬流先生に聞く

前篇

文化交流学科の長老・佐々木冬流先生に縦横に語っていただきました。編集部で誰にインタビューをしたいかと意見を出し合ったところナンバーワンが佐々木先生でした。渋くて、噛めば噛むほど味がでてきそうということで、お願いしました。二回にわたってお読みいただきます。

作文・評論から日本語を学ぶ

◆先生の基礎演習Ⅱで「読み書き日本語塾」というのがありますが？

――要するに文章表現法だから、昔流に言えば文章作法。「さくほう」じゃなくて「さほう」だぞ。簡単に言えば文章の書き方、日本語の書き方だよ。文章をどうやって書くかの講義をして、その次に、前期のうちには随筆の書き方、後期には評論の書き方。だから今評論やってる。最初にやったのは、意見文、その次に読書評論だよ。今回の宿題は、書評。小説じゃなくたっていいんだよ。誰かが書いた物を読んで、それを批評する。で、もう一つは人物評論。過去の有名な人でも良いし、マスコミなどを賑わしてる人でも、あるいは、自分たちの友人でも良いから、そういう人物などを取り上げて、紹介したり、批評したり。

◆学生からはそういった評論っていうものは、積極的に出るんですか。

――いや、今年は分からない。年によってずいぶん違う。去年はみんな、熱心にやっていた。少し本格的な評論をやってもらいたいから、過去の定評のある手頃な評論をいくつか紹介して、また、学生にそういったものを書かせようかなあと。

書くことが、一番大事なことだ。そうして馴れるんだな。４週間にいっぺん作文を出すんだよ。それを全部ぼくが読んで、訂正したり、意見を書いたりして返すんだ。で、学生はそれを読んで勉強する。だから塾なんだよ。去年の連中は、僕が書いたことをちゃんと読んで、色々頭に入れて文章書くから、けっこう上達したんだけど、今年の連中はどうなのかな。（笑）

本気でやると面白いと思うんだけど、乗ってくるか乗ってこないかは、年によってちょっと違うんだよ。乗ってきてくれるといいんだけどね。

日本語の特徴は出来るだけ短く話す。それから相手を気遣って話す。

日本語の特質

◆「日本語と社会」の授業についてもお聞きしたいのですが？

――日本語教育に関する科目だな。日本語には欧米語とは全然違う特徴がある。それはどういうもんなのか。特に日本語の先生になるためには、そういうことを頭に入れとかなくてはいけないだろうと思うんで、これを結構時間かけてやっている。

日本語の特徴は、できるだけ短く話す。それから、相手を気遣って話す。敬語だけに限らず、色々あるんだよ。短い表現が多いし省略が多いし。だから当然聞く方では、それを勘を働かして自分で補いながら聞かなきゃいけない。そういった意味で日本語ってのは結構難しいということだな。

君たち気がつかないと思うけどやっぱり、君たちも日本人なんだよ。君たちの会話の中で、主語なんかしょっちゅう省略するだろ。話し言葉の場合だと、尻切れトンボみたいになっちゃうことがある。話が途中で終わるんだけど、ちゃんと相手に伝わってるってこともある。そのあたりずいぶん欧米人の言語感覚とは違うはずなんだ。全部言わなくても分かる。日本人はそういう会話してるからそういうもんだと思っちゃってるんだよな。

ただ文章書くときそれでやると、本人は分かってても、相手に伝わらないってことがある。ちょっと気をつけなくちゃいけない。欧米人並みのきちんとした文を書くことを、ある程度は頭に入れとかなきゃいけない。それで、省略したり、できるだけ長ったらしくならないで短い表現にしたりというのは、時と場合で塩梅すればいい。

でも、君たちはほら、生まれて言葉を喋るようになったときから、そういうことやってるから、みんなほとんど気がつかない。でもそういうことが分かってないと、特に外国人に日本語教えるってのは無理だ。そういうことで、日本語の心遣いってのをとくに、今年何時間かな、５コマか６コマあるな。だから半分近くこれに取ってる。

それから一時間だけ非言語コミュニケーションについてやってるが、あれやらないと、日本語と社会にならないから、取り入れてるだけで。簡単に言うと身振り手振り。あと表情。実際に話ながらそういうものをさりげなく、みんな使いこなしてる。言葉は使わないで、身振り手振りだけでやる言語もあるんだよな。

本質は今も昔も

◆今と昔で学生が変わってきてると思うんですが。

――うん。そりゃやっぱり変わってきてるだろう。近代化が進んでるし、日本の社会がなあ、昔の部落的な社会から、解放された社会になってきて、いわゆる個人主義的な考え方が、段々浸透してくるから、そりゃだいぶ違ってるけど、じゃあ全然違って欧米並みになったかっていうとそうじゃないしな。やっぱり、大昔、古代からの日本人的な物の考え方、あるいは、人間づきあい、その基本は変わってないからやっぱり全然別な物にはなってないんだよ。

僕が大学生になったのは昭和34年。１９５９年だ。それから数えて、もう50年だ。だから違ってるのは当たりまえだよ。でも、大きな意味で言うと本質的にはそんなに違ってない。だっておんなじ人間だもん。６００年ごろの『万葉集』なんか読んで、「案外近代的だ」なんて歌はたくさんあるしな。だから人間そのものってのはそんなに変わってないんだよ。文化の程度が違う。だから一見かなり違うようには見えるけど、本質なんかそんなに違うわけじゃないと思う。

まあ本質的にはそんなに違わない。でも大体、着てるものが違うだろ。ジーパン履いて大学生が大学に通うようになったのは、30年くらい前か？　昔はやっぱり、先生もきちんとした格好をして来た。今先生もかなりへんてこな格好してる人もいるけど。（笑）

学生だってある程度きちんとした服装で行かないとやっぱり失礼じゃないか。そういう時代だった。昭和のはじめごろの昔は、とにかく大学の先生っていうのは、モーニング着て講義してたそうだ。今だと結婚式くらいにしか着ないだろ。だから、教室ってのはそういうところで、講義をするってのはそのくらい大変

なことだったんだ。そりゃ僕の時代にはもうモーニングで授業してる先生なんかいなかったけど。昔の帝国大学時代のことだな。

本質的にはそんなに変わらない。ただ表面は違うよ。特に今ほら、マスコミが煽るし、商業資本も煽るだろ。だからまあ、ぱっと見た感じなんかぜんぜん違うのは当たり前だ。

◆文化交流学科では外国に行って来いという風がありますが、自分も3年前に初めて海外に行きました。それで日本と海外の違いに触れて。帰ってきて先生の講義聞いたときに不思議なくらいわかりやすく聞こえました。外国に触れて当たり前の日本の姿があらためて見えるようになったというか。講義を聞いてたんか肯定されてるような気はしました。

――日本のものが全部いいわけじゃないし、改めていかなきゃならないものも多いとは思うんだけど、かといって全部が全部否定されるべきものでもないしな。それに否定したって、そういうことが改められるかっていうと、そういうもんでもないんだよな。それがいわゆる伝統ってもんだよ。

日本文学・学生時代

◆どうして日本文学を？

――子供のときから好きだったからだよ。文学なんかやるなって反対されたんだけど。どうしてもやりたかった。大学へ入るとき、政治学科も受けたんだけど、両方受かっちゃうとやっぱり文学のほうにいきたくなって、手続きしてしまった。親に文句言われたらそれはその時だって感じだったな。やっぱり好きだったからだよ。

小学校4年生のときに読んだ『三銃士』、『十五少年漂流記』、両方とも翻訳文学だよ。あれがすごく面白かった。あといろいろ読んだけど、昔のものはまあ、はっきり覚えてないなあ。

◆文学を志されたときに、この作家が好きだとかっていうのは？

――詩人では、島崎藤村かな。中学生のころだな。それから、高校生になると、夏目漱石かな。

◆今は国語で夏目漱石やったりしますよね。

――漱石、鴎外はどこの教科書にも出てくるよ。夏目漱石は教科書に載ると必ず『こころ』。あれはちょっと気に入らないんだけどな。まあ素敵な作品なんだろうけど、あの暗い作品をもったいぶってこれでもかこれでもかって若い連中に押し付けるのはよくないな。高校生、たとえば受験の面接かなんかでも、「『こころ』が素晴らしかったです。」「おお、『こころ』、どこで読んだんだ？」ってことになったら、「教科書に出てきました」。それで素晴しいといえるわけないじゃないかっていうんだ。

漱石ならまず『三四郎』『それから』あたり読んでもらいたいな。それから『我輩は猫である』も面白いぞ。

◆大学時代にお友達と、この作品が面白い、とか駄目だとか話し合ったり、そういうのはあったんですか。

――時々やったけどな。それよりも我々の場合は片っ端から何でも読んだってことかな。そん中からまあ、自分の好きなものが段々絞り込まれる。人によってかなり好みの差はあるだろ。たまに「こんなものいいぞ読んでみろ」なんて言われたって、「面白くないな」と思えばもう読まないし。とにかく読みたいものを片っ端から読む。有島武郎が面白いとなれば有島武郎ばっかり、ばーっと読みまくった。でも有島はちょっと作品が長くてたくさんあるから大変だ。芥川龍之介なんか、分量はたいしたこと無い。全集3冊。あっという間に読んじゃう。

作品に息づく人間

◆日本文学を通して学生に一番教えたいことってありますか。

――文学そのものを対象にして講義する場合と、文学をひとつの手段にして講義する場合がある。今ぼくがやってる近代思想もそうだけど、近代思想だけ講義したって誰も聞きやしないだろ。それで、文学に現れた近代の思想ということにして、小説を多少具体的に解説しながらそこに近代思想がどう現れてるかっていう授業をする。これはもう文学そのものの講義ではなくて基本的には思想の講義なんだな。材料・手段として文学を使っているって、そういうことだな。

文学そのものを題材にしているのは、江戸初期の怪談話。ここ6～7年毎年やってんだよ。あれは100パーセント文学。怪談話も一応文学だからな。簡単に言うと、文学は人間そのものだから、自分をどう表現するかが問題だ、それで作り上げたのが詩であったり小説であったり。そこには作家そのものが丸々息づいてるわけだろ。それは人間そのものなんだ。だから文学を読むってことは、作品の中に充満してるその人間をどう捉えるかってことになる。

もっと教育的にいえば、それを今度自分に振り返ってみて反映させて、自分をどう育てるかってことにも跳ね返っていかなきゃいけない。文学教育ってのはそういうものだと思ってる。できるだけそういうことをわかってもらいたいなあと。

◆私たちも国語の授業を通して人間について考えていかなければいけないなあって思いました。

――国語＝文学という風にきこえるけど、高校あたりまでの国語ってのは、資料としてたくさん文学を使ってるけど、国語っていうのは簡単に言うと日本語だから、日本語にはいろいろあるだろ。その日本語を使って文芸的な作品を書いたのが文学だ。だから、文学は正確に言うと国語の中の一部でしかない。

◆ご自身が作品を読んで、こうなりたいとか。あるいはこうなりたくないなとか思ったことはありますか。

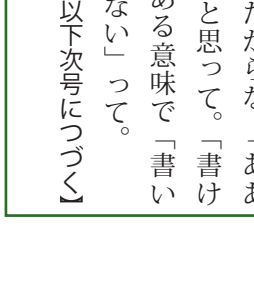
――両方あるんだよ。読んでて、もう無条件で、「そういう生き方がいい、そういう生き方をしたい」って惹かれていく場合もあるし、そうじゃなくても、その一生懸命な生き方が、何か自分と共鳴すると、とにかく惹かれていくってこともある。もちろん大変理想的な生き方であっても、「ああ嫌だな」と思う場合もあるし、そりゃ時と場合でいろいろあるから面白い。

最近、昔ほどは小説も読まないけど、何か研究者になっちゃったからなあ。どっちかっていうと批判的に解釈的にばっかり読むようになっちゃって、気楽に楽しみながら読むってことが少なくなったかもしれないな。完全にご隠居さんになったらそういう読み方もまた始まるかもしれないけどな。

最初は作家志望だったんだ。だから大学時代なんて書いてばっかり。まあ読むことも読んだけど書いてることが多かったな。ただ書くほうは、簡単に言えば成功しなかった。途中でやめてしまったからな。「ああ駄目だ」と思って。「書けない」。ある意味で「書いちゃいけない」って。

【以下次号につづく】

文学には作家そのものが丸々息づいている。それは人間そのものだ。



漱石は教科書に載ると必ず『こころ』。あれはちょっと気に入らない。

泥を捏ねたり 空を眺めたりした経験が 今の私自身を支えている

テレビ・ディレクター 映画監督　野中真理子さん

11月21日、ドキュメンタリー映画監督として知られる野中真理子さんの講演会が開かれた。

野中さんは『世界の車窓から』などテレビ番組のディレクターとして活躍、その後、『こどもの時間』（01年）『トントンギコギコ図工の時間』（04）で記録映画監督として活躍している。

野中さんは学生時代に新聞部員として活動したことをきっかけに、卒業後も編集の仕事に就かれた。入社して間もない頃のご自身の葛藤やその後ご自身が仕事に対して「これは天職だ」と思われるまでの経緯などの内容は、これから社会に出て行く私達には興味をそそられる内容だった。

世界各国の列車から見える風景とそこに暮らす人々の生活を扱った『世界の車窓から』（テレビ朝日）を制作するため国外を飛び回り、帰国すれば編集室に籠もって編集に明け暮れるというハードな日々を過ごされていたという。

当時の海外ロケでのエピソードが会場にいる学生たちの笑いを誘うという場面もみられた。そのような海外ロケを通して日本では考えられないような場面に何度も遭遇するうちに「どんな時も楽しまなくては！」と思うようになられたそうだ。

その後9年間勤めたテレコムスタッフを辞めて、フリーランスのディレクターとなってからは自主制作で映画を製作。結婚をして子供ができた頃には世界を飛びまわるような仕事はせず、家族で埼玉県桶川市に引っ越し、01年に「いなほ保育園」に通う子供たちの生活を見つめた『子供の時間』を製作。

子供たちには子どもたち独自の時間が流れていると語るこの作品は、ナレーションもほとんどつけずに見た人がそれぞれに子どもたちの言葉を汲み取るというもの。講演の中で野中さんが「子どもたちが本当は何を思っているかなんて本人にしか分からない」とおっしゃっていたのがとても印象に残っている。

映像や子どもたちの様子から私たちが忘れてしまったものを感じた。「子どもの頃に泥を捏ねたり空を眺めたりした経験が今の私自身を支えている」ともおっしゃっていたのが印象的だった。

講演を聴いて…

◆野中さんの講演を聞いて「何が大切か」ということを考えさせられた。社会生活を営む上で言葉はとても重要な価値を持っているし必要であるし、私自身必要に迫られて外国語を勉強していることもあったり、それをうまく使って自分の想いを伝えたり、相手の考えていることを理解出来たときに達成感を感じることもある。

しかし、野中さんの「子どもの時間」を見た際「言葉を使った表現の不十分さ」を感じた。私たちが普段誰かしらと対話する場面において言葉は必要不可欠だが、その言葉が存在するがゆえに制限されている「言葉以外の領域」も計り知れない程存在するということに気がついた。伝え得る方法・手段はもっとたくさんあるのかもしれないという期待と意思疎通に言葉を用いなければならない人間に寂しさや悲しさを感じた。

◆野中さんの話を聞いて、ディレクターという仕事の大変さを知った。新聞や雑誌を見るだけではなく、自分の目で確かめたものを編集する。それはたくさんの人に接しなければならない。日本だけでなく、時には外国に行ってその仕事をする。私はディレクターという仕事にとても魅力を感じた。私も野中さんと同じように内気な性格ではあるが、それが仕事を通して堂々とした人に変われるのなら、私もこんな仕事をしてみたいと思った。

ロンゴロンゴとは南太平洋ポリネシアのイースター島で昔作られていた「物を言う板」です。この板には文字のようなものが書いてありました。この文字はまだ解読されていないそうですが、これは島の人々に歴史や情報を伝える板でした。

編集後記

●今年で卒業（予定）ということで住み慣れた茨城から出て行かなければならないのがちょっと寂しい。

仲良くなった喫茶店のご夫婦とか中華料理店のおばちゃんとか…会えなくなるのが残念です。〔田中悠介〕

●新年の目標は何か立てましたか？　私は、この季節は寒さに負けて朝起きられないことがあります。目標にしても三日坊主で終わってしまいます。今年こそはと思っているので誰か秘訣を教えてください。今月号のロンゴや授業の感想と一緒にお待ちしてます。〔佐々木美和〕

●あんまん、肉まん、ピザまん、カレーまん……。私の悩みの種です。わざわざ歩いて少し遠くのコンビニへ……。凍えた手にまぁるいアイツ。あったかい。今日はチョコまんです。〔戸田亜希子〕

●学生生活も残りわずかになってしまいました。4月からは社会人です。

学生時代は楽器、釣り、レトロゲーム収集と、好きなことをやれて本当に満足しています。今は勤務地が海の近くでありますようにと毎日祈っております。笑。〔沼田庄平〕

編集部のメールアドレスは左記の通りです。
rongorongo_hensyuubu-owner@yahoogroups.jp

●これからますます寒くなりそうです。去年は雪がほとんど降らなかったけど今年はどうだろう。どろどろになりながら雪合戦をして遊んだ日を懐かしく思います。今年は小学生のときの行事以来やっていないスキーをまた滑りたいと考えています。

私は10月からロンゴ編集部に参加し話を文にしたりして見えるものが変わり楽しく充実した日を過ごせました。〔松本千里〕

●12月15日（土）、本学の創立40周年行事の一環として文化交流学科主催のシンポジウム「ひたち学への招待」が開催された。一番印象に残ったのはなんといっても、日立鉱山の公害に対する先駆的な対策のことだった。新田次郎の小説『ある町の高い煙突』に描かれたドラマを生んだ日立市に、本学は生まれ育ってきた。外来と在来がどのような創造に向かってこれから進んでゆくのか。これは他人事ではない。〔藤田悟〕

rongorongo はバックナンバーも含めて、次のURLでご覧になれます。
http://www.icc.ac.jp/univ/bunka/rongorongo/rongorongo1.htm